

あさひ 朝日遺跡

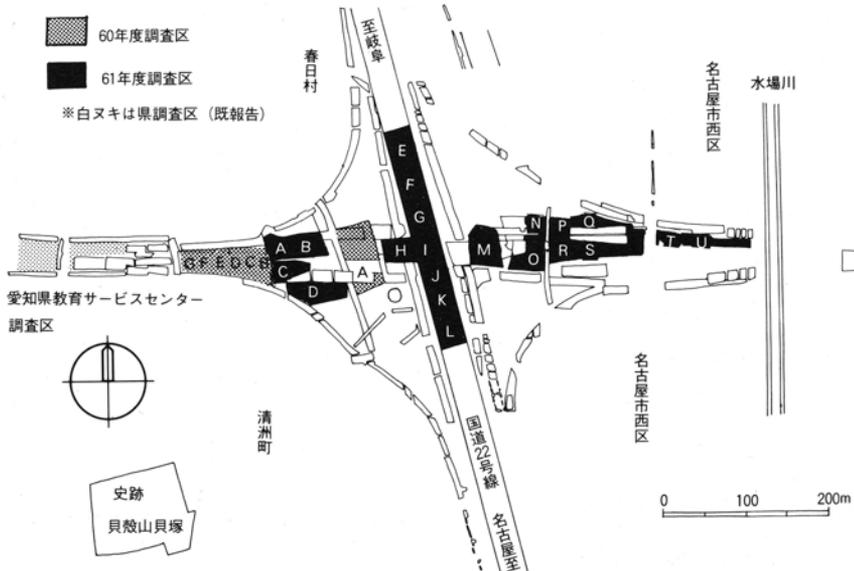
はじめに

朝日遺跡は五条川左岸の東西にのびる微高地上に位置し、これまでに検出された弥生時代の居住域・墓域から推定される面積は水田・畑等を除き70~80万m²にも及ぶ。遺跡の標高は包含層上部で約2.5mを測り、包含層の厚さは居住域で0.5~1mの幅をもつ。谷B・Cなどの埋積浅谷は弥生時代包含層基底で標高約-0.5mを測る。今回の調査では弥生時代基盤層である緑灰色粘土、黒色粘土等を掘り下げ、基底である上部砂層面を確認した。その掘り下げ途中では縄文土器や縄文時代に属す木製品の出土をみた。

本年度の調査はA~Uの21調査区に及び、面積総計22047m²である。国道22号線道路敷下をメイン調査区(E~G、J~L)として、西側にA~D、東側にM~Uの各調査区を設定した。

調査の成果は後に概説するとおりであるが、いくつかの重要な点をここに述べておく。朝日遺跡の時期区分は、従来弥生時代の枠内でとどまっていたが、今回の調査によって縄文時代、古墳時代前期にも生活の場が営まれていたことを確認した。また、中世の土壌群も良好な状態で検出しており、該期の土地利用のあり方を知る上で好個の資料といえる。

ところで、以下の記述に際して弥生時代はI~VI期の6期区分案を採り、その他は各執筆担当者に委ねた。(石黒立人)



第1図 朝日遺跡調査区位置図

I 主要遺構・遺物

A. 縄文時代

朝日遺跡においては、縄文時代中期末葉～後期前半に属す遺物の出土することが従来より認識されていたが、昭和60年度、61年度の調査でさらに当該期の土器・木製品が検出されたことにより、この時期の遺跡立地などに関して新たな問題を提起している。

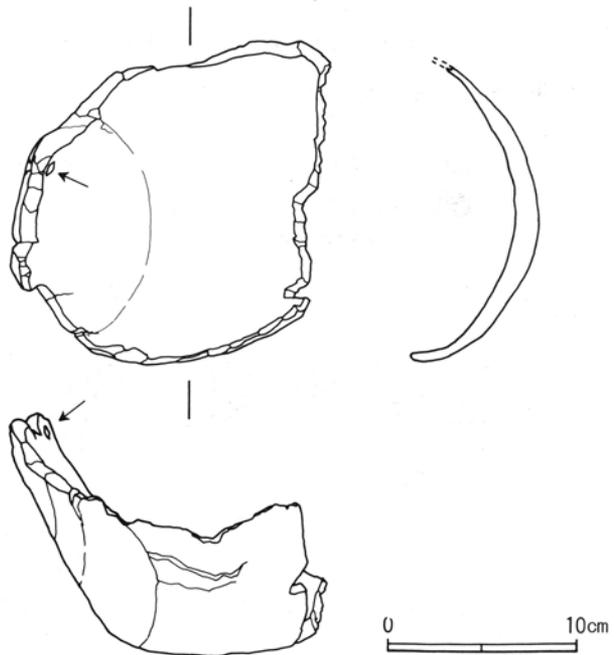
中期 第3図-1は深鉢の肩部で、頸部から胴部にかけて篋状器具により太い沈線のみが施されている。中期末葉に属す。

後期 土器5個体分が出土している。(4)は、ブリッジで連結される2単位の突起と小突起をもち、頸部でくびれ、胴上部がはる精製深鉢である。突起は上下・横方向に筒状になり、前後に貫通する円孔がある。突起頂部、突起、小突起の前面および両者をむすぶブリッジ頂部・口唇部に沈線の文様がある。頸部には2条の沈線が巡り、胴部には3条の沈線による7単位のS字状文が施され、S字の下部間および、上部・下部が右下がりて連結される。(2)は波状口縁の深鉢で、波頂部に5条の縦方向の沈線、口唇部に2条の沈線が巡る。粗製土器は、円筒状の単純な器形で粗いLRの縄文が全面に施されるもの(3)と、無文のもの(5)が存在する。その他に、器形・文様等が不明1点がある。(4)は堀之内Ⅱ式に併行。(2)はいわゆる縁帯文土器に近似し、堀之内Ⅰ式あるいはⅡ式に併行する。

木製品として後期前葉に属す杓子が出土している。(第2図)。推定長径約25cm、同短径約20cm、器高12.7cmを測り、凸部の2つの耳状部分のうち片方のみ穿孔(矢印)されている。

これらは、谷Cの南岸斜面に推積して有機物を含む黒色粘土層中より出土しており、遺構に伴うものではない。しかし、土器はまとめて検出されており、また木製品の出土したことにより、この時期の居住域が近接していたことが推測される。

(酒井俊彦)



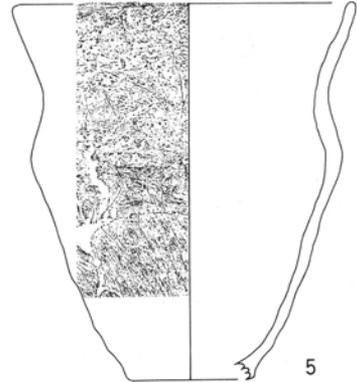
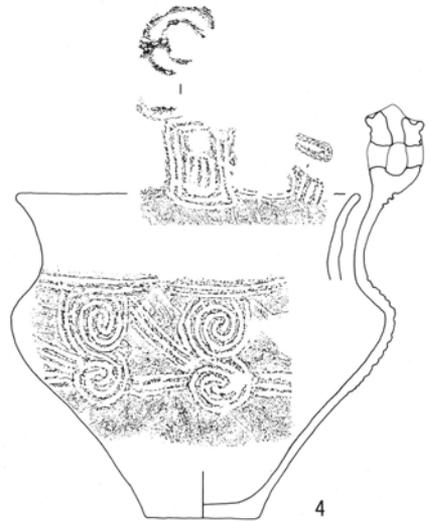
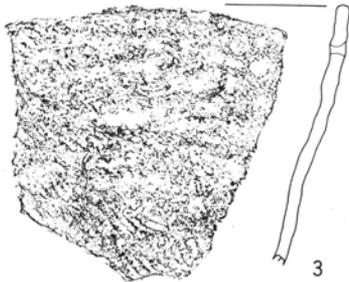
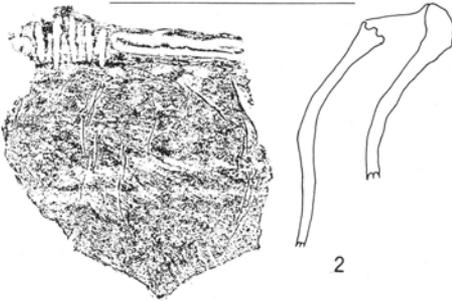
第2図 B区出土縄文時代木製品(杓子:1/4)



杓子出土状況



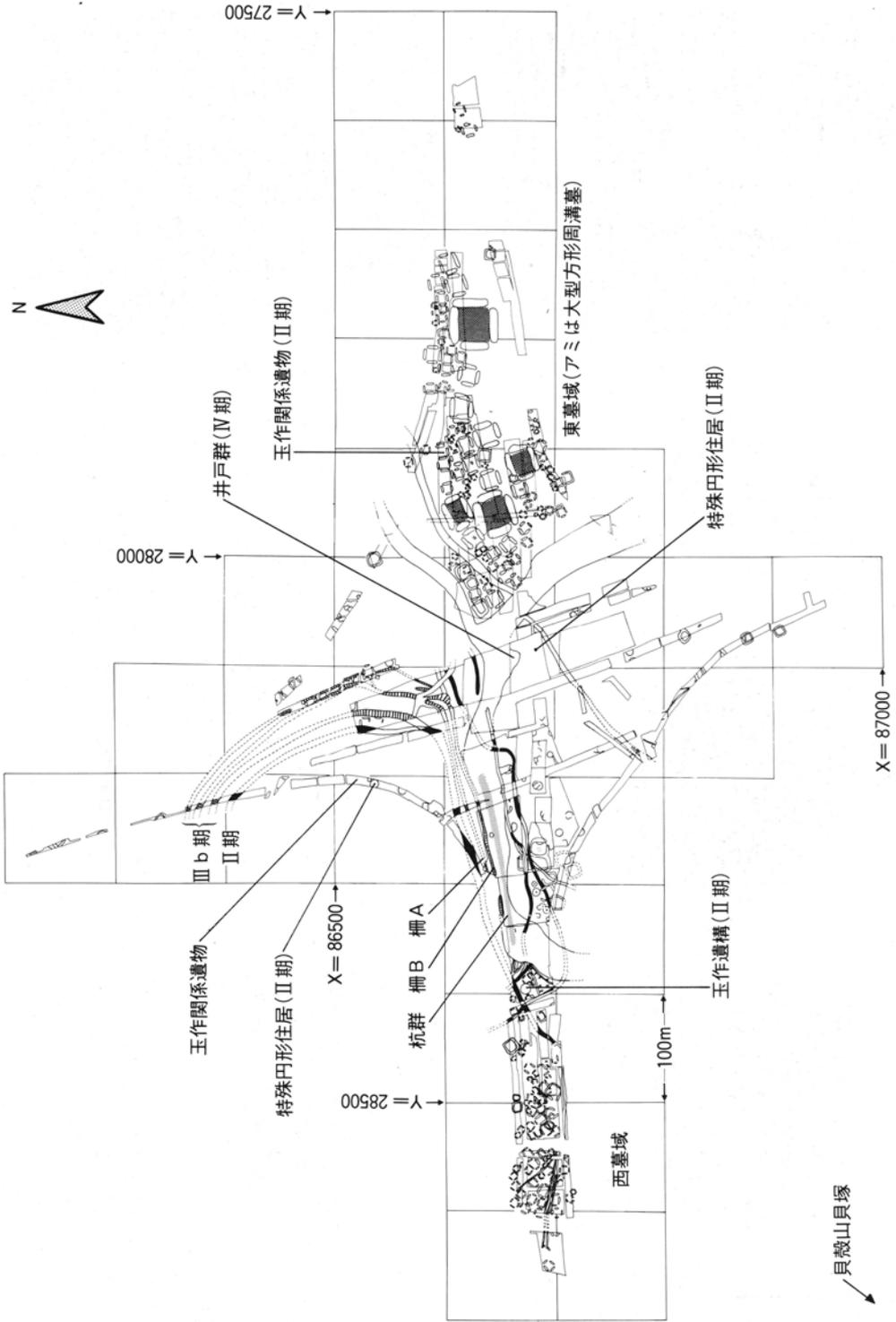
縄文土器出土状況



0 10cm (1~3)

0 10 20cm (4.5)

第3図 朝日遺跡出土縄文土器



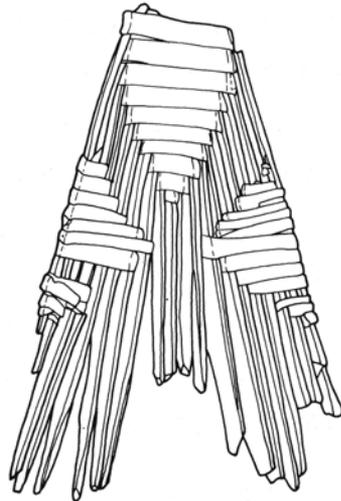
第4図 朝日遺跡弥生時代中期遺構全図 (1:6000)

B. 弥生時代

〔中期〕

Ⅱ期前半の大溝（SD21） この大溝（SD21）はH区にその端を発し、谷C南縁に沿って西へ延びA区において南へ折れ曲がる溝で、現在までの調査で累計約200mを確認している。幅2～4m、深さ0.7～1.5mを測り、断面逆台形を呈する。A区の調査ではⅡ期環濠との切り合い関係を確認しており、それ以前に谷南側の微高地に構築されたものであることがわかった。A・C区の環濠に近接するところでは、埋土中位以上に弥生時代の基盤土である青灰色ならびに黄色シルトのブロックが堆積しており、環濠掘削に伴い埋められた様相を示していた。またC区及び60B区においては、このシルト層下にハマグリを主とした貝層の堆積も見られた。溝内下層に堆積した黒色粘質土層中よりⅡ期の土器が出土したものの、その量は他のⅡ期の溝よりも少なく、全形をうかがえるものは数点にすぎない。出土土器において注目されるのは、Ⅱ期の櫛描文系の資料に共伴して篋描沈線文を有する資料が出土していることで、この溝が前述のように遺構の切り合いからみてⅡ期の中でも古い段階に構築されていることとあわせて編年上注目すべき資料と言えよう。また、溝内からは、土器以外にもいくつか注目すべき遺物が出土している。A区で曲がり始める部分付近から猪の下顎骨両頬部に穿孔を施した資料が出土した。同類のものは、佐賀県菜畑遺跡、奈良県唐古遺跡等、西日本において出土例が増加している。B区東半部分では、埋土中にこぶし大以上の礫が多数

見られ、木製品として石斧の膝柄、高杯等が、また主要な石材である安山岩の原石・一次打割資料がまとまって出土している。この中で最も注目されるものとして、竹製の竖櫛がある。頂部と歯先の一部を欠くものの、ほぼ原形をとどめており、現存長は9.8cmを測る。厚さ2mm程の薄板10枚をU字形に折りまげ、桜皮にてとじ20本歯の櫛を作り出す。漆等の塗付は見られない。このタイプの竖櫛としては最も古い資料である。（丹羽 博）



第5図 SD21出土櫛(3/5)

防禦施設Ⅰ A～C、E～G Jの7調査区でⅡ期に属す大溝を検出した。Ⅱ期のうちには埋没を始め、Ⅲ期には完全に埋没する。

60年度年報ではB・C・D区SD02a、SD03ともA区SD06に連続させたが、本年度調査によってSD02bは北へ屈曲して途切れることがわかった。したがってA区SD06はSD03と接続することになる。ところで本年度確認した60B・C・D区SD02bの末端部分は略鍵手状を呈し、阿弥陀寺遺跡例との類似性が注目される。しかし、付近に意味ある柱穴の配置はみられなかった。

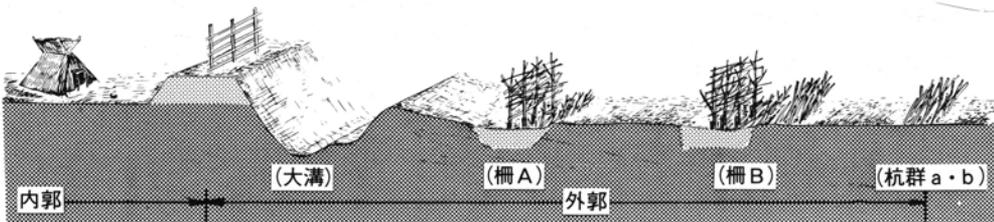
G・I区では東西に走る大溝を3条検出した。中間の一条は60A区SD06に接続する可能性がある。さらに最南の一条は、60A区でSD06から分岐した東西方向の溝と断続して〈囲郭集落〉の最も外側を廻る可能性もある。この溝に挟まれた空間は居住域＝内区(郭)に対して外区(郭)と呼称すべきと考える。

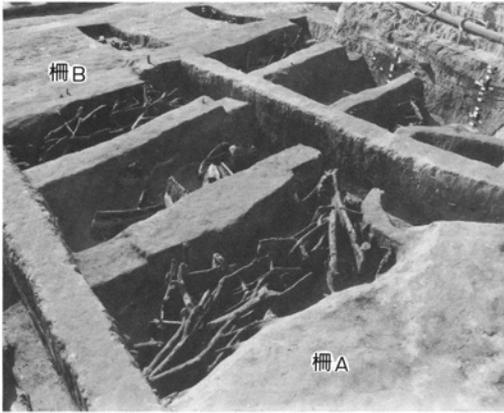
防禦施設Ⅱ A・B・E～Gの5調査区でⅢ期末に属す、柵、杭群、大溝等を検出した。

A・B区で検出した柵A・B、杭群a・bはすでに60年度にその連続部分を調査しており、今回の調査によって谷C微低地内では断続しつつ、F区に続くことが明らかとなった。F区では北西から南東方向へやや南へ弯曲してつらなる杭列群15mばかりを検出しており、先の柵A・Bはこの杭列群とほぼ直角に交わる部分で合流している。ところで柵A・Bの延長方向(E区)は大溝となり柵自体途切れるようである。これはA・B区が微低地であったのと異なりG区以北が微高地であることによるのであろう。すでにG区では、柵を設置する溝の規模はA・B区に比較してかなり大きくなってきており、杭列群を境に柵から溝への移行が図られたのかもしれない。

F区で検出した柵A・Bに直交する杭列群は、横木で根固めしており、A・B区杭群a・bと大きく異なる。現状では柵A・Bでみられた枝をもつ杭はほとんど認められないが、打ち込み杭に根固めを必要としない点を考えると、本来は上部構造として柵A・Bと同様のものがあつた可能性もある。

柵A・B、杭群a・bは、60年度A・B～E区本年度A・B・G区の累計約250mの長さにわたってⅢ期末居住域を囲むことが確実にした。全周するかどうか確定しないとは言え、その存在はこれまでの弥生集落観を転換させるものとなる。 (石黒立人)



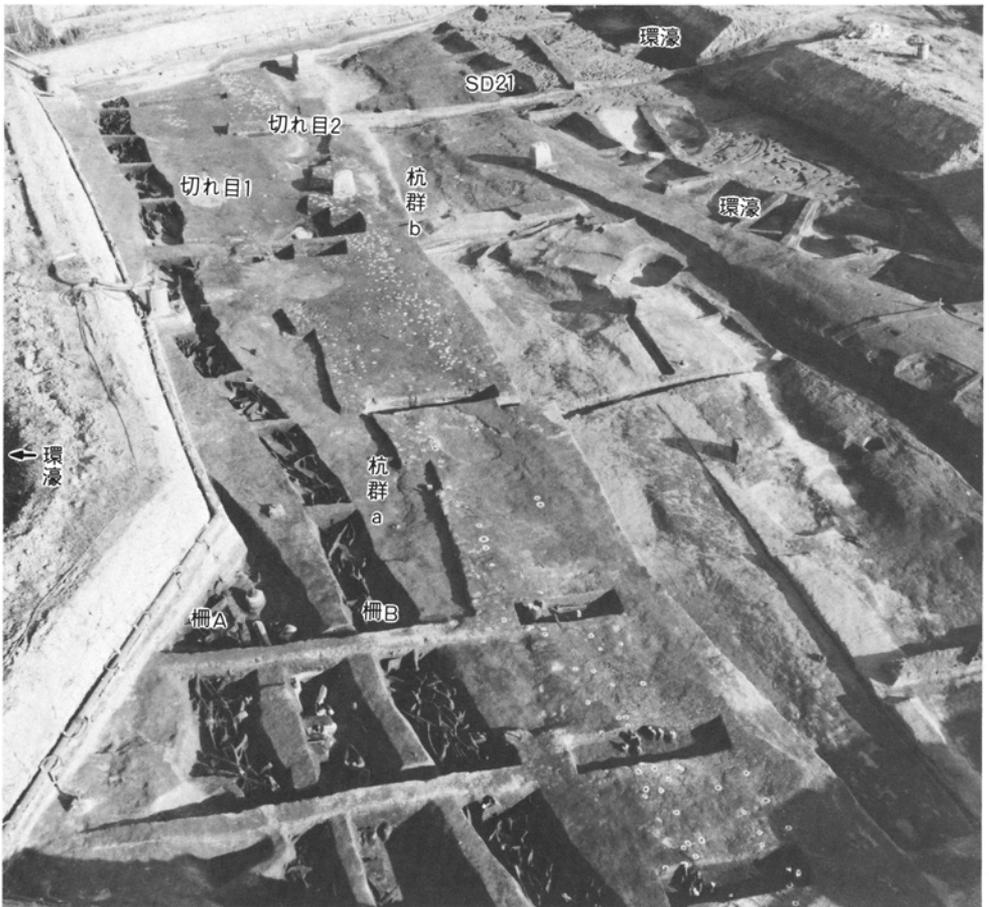


△ 北東から



柵B部分

▽ 西から



住居・土坑・柵 竪穴住居はE・F・Q・R・S区を除く調査区で検出した。所属時期はⅡ・Ⅲ期を主とし若干Ⅳ期を含む。平面形態は隅丸方形を主とし、円形は従属的に存在する。方・円の分布状態は、円を中心として方を取り巻く、円・方半々、円のみ、方のみというような一定の組み合わせを見せるようである。これまでのところ円形竪穴住居はⅢ期をもって終わり、Ⅳ期以後はすべて方形竪穴住居になる。

掘立柱建物は、東墓域の大型方形周溝墓下で検出されたものを除き、特に注目すべき点は認められない。竪穴住居群との混在が通例である。

大型方形周溝墓R区S Z01基盤面で確認した掘立柱建物は2間×3間で、すぐとなりの県調査区S B008(1間×2間)と1単位をなす。付近に竪穴住居はなく、南東にも同様な1単位の存在することからみて、この地区が特別な意味をもっていたのかもしれない。

土坑は、Ⅱ期に属すものは舟形・長方形を呈するものが主で、埋土は焼土、炭化物層、地山土の互層を呈するものが目立つ。Ⅲ期以後は楕円形、不整円形が主で、埋土は互層を呈するものはあまり目立たない。

特に注目されるのは、Ⅱ期の舟形土坑、長方形土坑の配置である。D区では、長軸を東西、南北方向にあわせている状況が看取された。一定の配置を取っているものと看做し得る。

柵はⅡ期に属す例を検出している。D区ではT字のピット列と土坑が一定の方向的関連をもって配置していた。居住域における「地割」の存在を示すものとして注目される。今後詳しく追求しなければならない点である。(石黒立人)



61D区 住居・柵・土坑 (西から)

大型土坑 A・B区で検出された大型土坑は、微高地北端から谷Cへ移行する部分に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径 8.0m、短径 5.2m を測る。土坑底部は浅い播鉢状をなし、掘方より深さ 0.5m を測る。埋土は砂粒を多量に含む黒色土を主とするが、部分的に黒色土と粗砂が互層をなす南斜面からの流れ込みもみられる。

遺物は、土坑全面からレベルの高低に関係なく密集した廃棄の状態出土した。出土土器は、Ⅳ期の一括土器群である。その多量の土器と混在した状態で、木碎片、加工木、木製品が見られた。

出土木製品は、約30点を数え、横槌、鋤類鋤類等の農具類、横斧の柄等の工具類、穿孔板等の不明木製品が見られる。

横槌は、この土坑だけで、5点見られた。(1)は、敲打部の長さ21.6cm、径 7.6cm。敲打部の長さ比べ、径が大きい。(2)は、敲打部が四角く面取りされており、敲打部の長さが24.0cm、一辺が約 5.5cmを測る。(3・4)は、敲打部と柄部の境に低い突帯を有する。(3)は、敲打部の長さ24.0cm、径 5.4cm。(4)は、敲打部の長さ27.6cm、径 6.8cmを測り、敲打部がやや長い。これらの横槌は、いずれも敲打部と柄部の境界は斜めに傾斜し、豆打ち用とされる「細くて長い形態」^(註)にあてはまるものである。

(5・6)は共に広鋤。(5)は、柄壺の両側に抉りをもち、外側に舟形隆起をもつ。身の長さ36.2cm、身巾11.0cmを測り、装着角度は56°を測る。(6)は、両側辺の湾曲する形態で、ほとんど欠損しているが、中央外側に舟形隆起をもつ。装着角度は56°を測る。

(7～9)は、細身の「鋤」で、所謂、「掘串」と呼称される掘り棒である。(7)は柄の途中でおれているが、一木造りになると思われる。身の長さ17.4cm、巾 7.2cmを測る。(8)は身の先端を欠くが、残存部より先端は巾広の身をもつと思われる。身巾は 9.2cm。(9)は身の長さ14.2cm、巾 8.2cmを測る。(8・9)は形状からみて棒状木製品との組



大型土坑遺物出土状況

合せ、または単独での使用が想定できる。

(10) は、8本歯の又鋤である。基部は突出し、身中央は四角く凹む。身に一直線の柄を装着した場合は鋤としての使用を、また直角から鋭角の柄を装着した場合は鋤としての使用というように、鋤、鋤両面性を備えている。

(11) は、横斧の柄である。装着部は 3.4cm、全長は42.4cmを測る。装着部長からみて小型の片刃石斧を装着したものであろう。

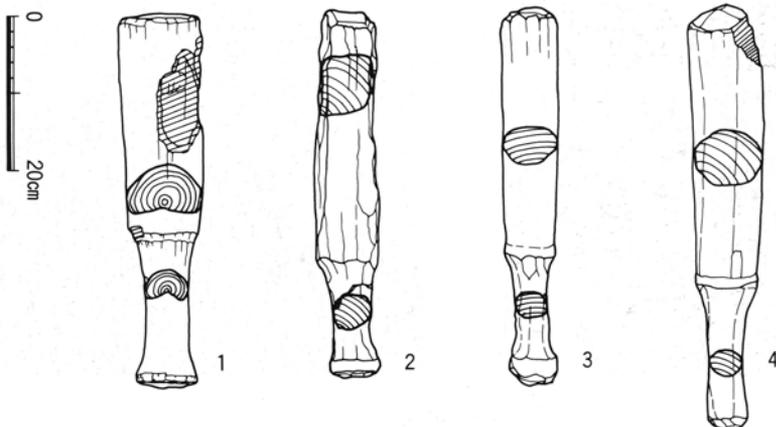
(12) は、細長い糸巻き状を呈し上端に豆状の突起がつく。下端は、棒状部分が途中で欠損している。一木造りである。

(13) は、扁平で鐘状の身の upper 端に豆状の突起がつく。下端は断面楕円で棒状にのび、途中で欠損している。一木造りである。

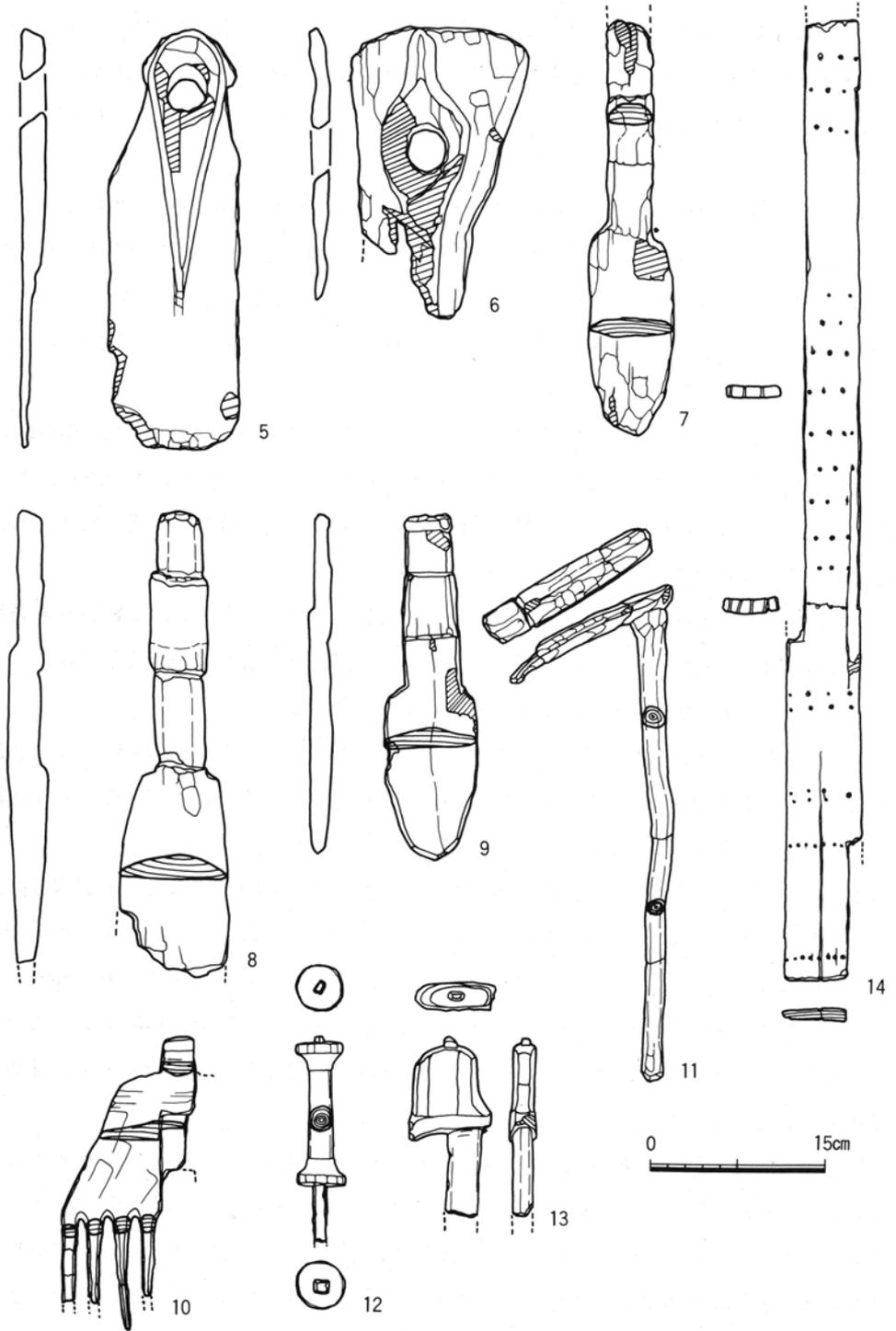
(14) は、孔列赤彩板である。巾 6.4cmを測り、片端は欠損している。表面にわずかであるが赤色塗彩の痕跡を残す。

Ⅳ期に属す木製品は、この大型土坑の他に柵 A・B 廃絶後の溝内からも多量に出土している。県教委調査段階には分類できるほどの出土量もなく研究材料としての有効性に欠けていたが、今回の膨大な出土によって統計処理も可能となった。また、農耕土木具の場合は製作工程の復原もできるようになった点を注目したい。今後詳細な検討を加え、木製品における特質の把握に努めたいと考えている。しかし、残念な点を1つあげるとすれば、前後の時期に属す資料の少なさであり、そのため通時的分析による木製品総体の変遷を詳細に把握し得ないことである。Ⅳ期の土器にみられるような交替現象を木製品についても認めることができれば、該期の理解をさらに推し進めることができるはずであるが。

〔註〕 渡辺誠「ヨコヅチの考古民具的研究」(『考古学雑誌』70-3 1985) (佐藤公保・石黒立人)



第6図 大型土坑出土木製品



第7図 大型土坑出土木製品

方形周溝墓 本年度調査において方形周溝墓の検出された地区は、A・C・D・E・F・L・M・N・O～Uの各区であり、このうち弥生時代中期の方形周溝墓はD・L両区を除く全調査区で検出された。特に東墓域に相当する位置にあるO～U区では弥生時代中期では全国最大級の規模をもつものも検出されるなど大きな成果をみた。以下O～U区を中心に説明する。

O・R・S区で検出されたS Z03は、Ⅱ期に属す大型方形周溝墓である。台状部の規模は東西約34m、南北約24mを測り、過去の調査例において最大とされている大阪市加美遺跡の弥生時代に属す方形周溝墓(26×15m)を大きく上回る規模を有する。S Z03の西溝南寄り最下底部からは、2本の狭鋤が、溝の主軸と方向を合せるように、点对称に置かれた状態で出土している。

R・S区と同じくⅡ期に属すS Z01では、良好な状態で主体部が検出できた。墓域内には木棺を入れたと思われるプランとは別に、径約30cmのピット状の掘り込みがあり、その埋土上層から管玉15片が出土した。朝日遺跡における弥生時代中期の方形周溝墓で、副葬品を伴うのは今回が初例である。

T・U区では、Ⅲ期後半に属す大型方形周溝墓S Z01を検出した。東西長約35mを測り当墓域最大である。このS Z01においても、北側の溝最下底部から一木造りの鋤が3本並んで出土し、他に組合わせ式の鋤も身も2本出土している。

朝日遺跡の居住域東側に位置するこれらの方形周溝墓群は、Ⅱ期以後の各時期ごと核となるように大型方形周溝墓が存在し、その周囲に主軸を合せるように同時期の方形周溝墓が展開するという構成を見せる。

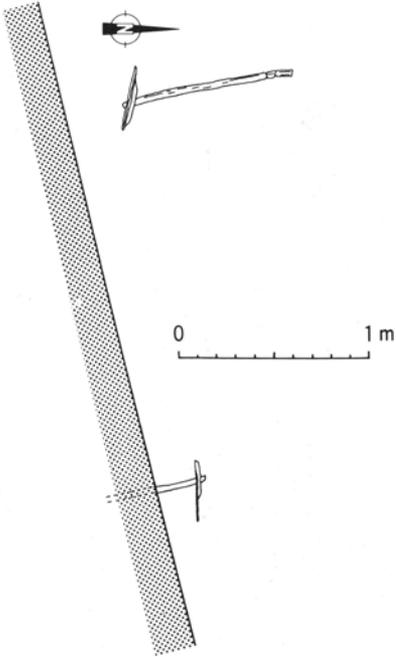
これとは別に居住域西側にも、東墓域の方形周溝墓群と時期を同じくする方形周溝墓群が存在する。しかしこれらの規模は東側のものに比較すると小さく、中・小規模のものであり、ある程度規格性を持つような統一的な造られかたをしている。また東側の墓域の小規模なもの、西側の墓域の小規模なものとはほぼ同規模であることも興味深い。この東西の両墓域は、時期的に併行するものであっても墓域の構成要素の違いなどから、被葬者群としては区別すべきものであると思われる。

弥生時代中期の方形周溝墓は、西日本では溝の全周するものが一般的で、東日本では四隅の切れるものが一般的であるが、朝日遺跡で検出された四隅の切れる方形周溝墓のうちⅡ期にあたるものは、同形態のものとしては最古のものである。また四隅の切れる方形周溝墓群は、伊勢湾以西において朝日例に先行する例は未だ確認されていない。これらのことから朝日遺跡の方形周溝墓群は、東日本に波及する方形周溝墓の起点となった可能性が高い。また周溝最下底部より出土した木製品等は、造墓時の儀礼的行為を窺わせ得る資料

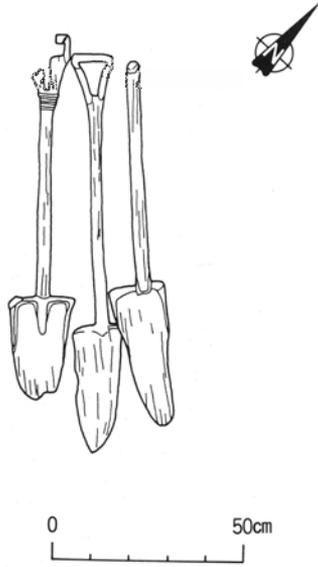
として興味深い。

朝日遺跡における墓域の構成をみると、既にⅡ期の段階において墓の規模に大きな格差が生じている。特に大型方形周溝墓は弥生時代における列島の墓制を考える上で重要な資料となるであろう。

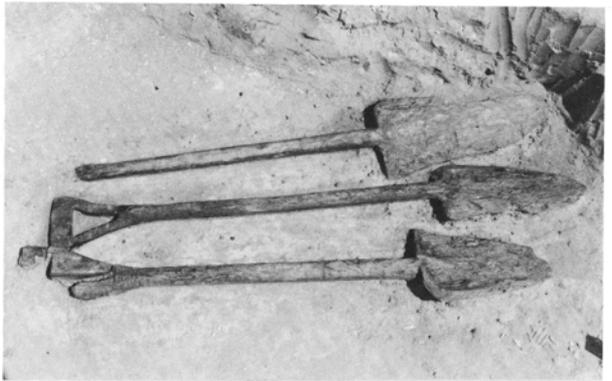
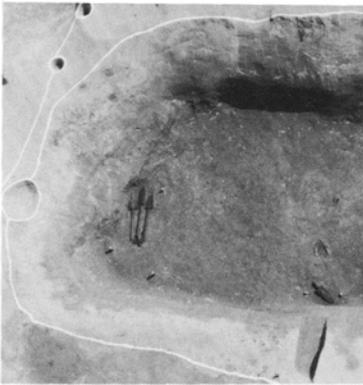
(松田 訓)



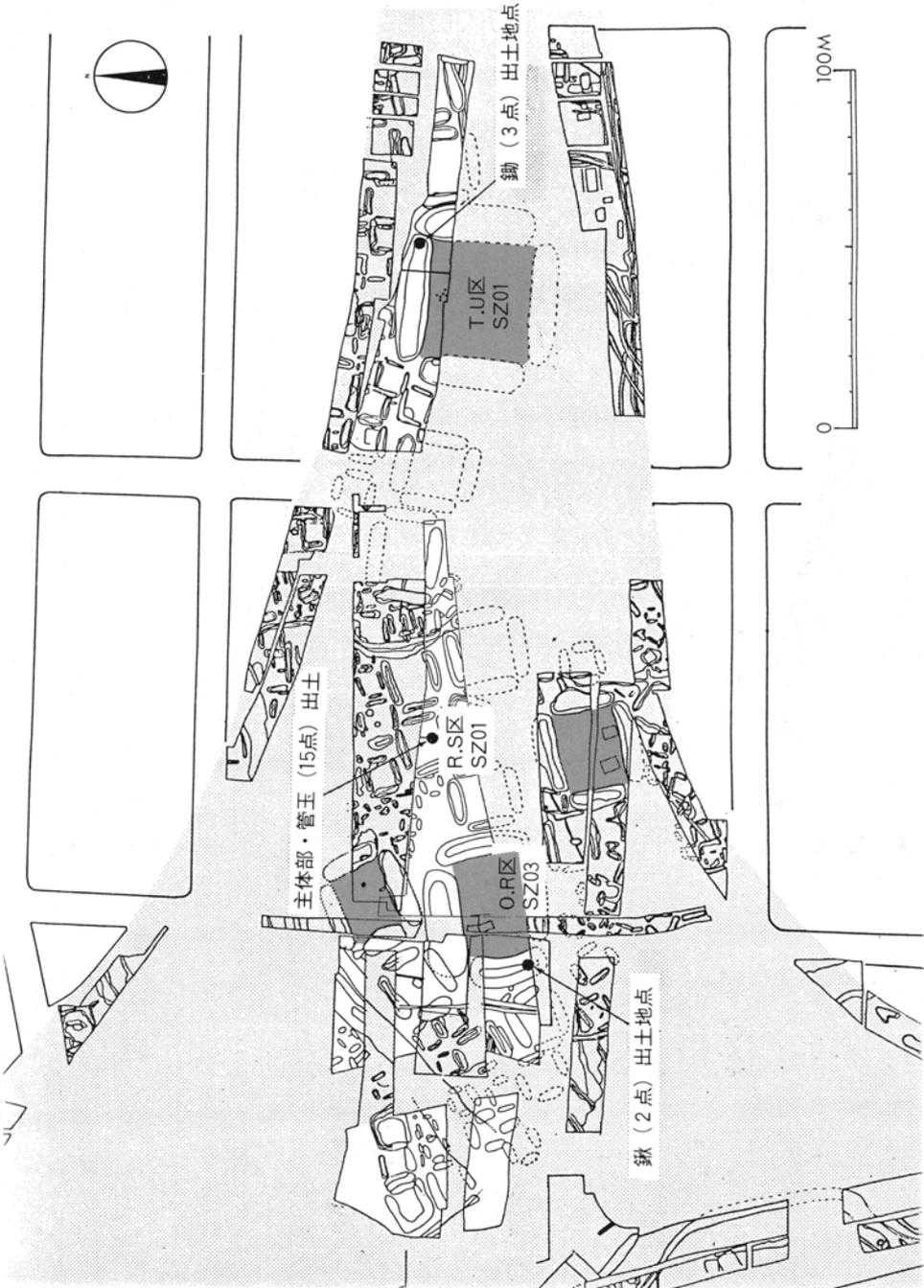
第8図 O・R区SZ03西溝掘出土状態図



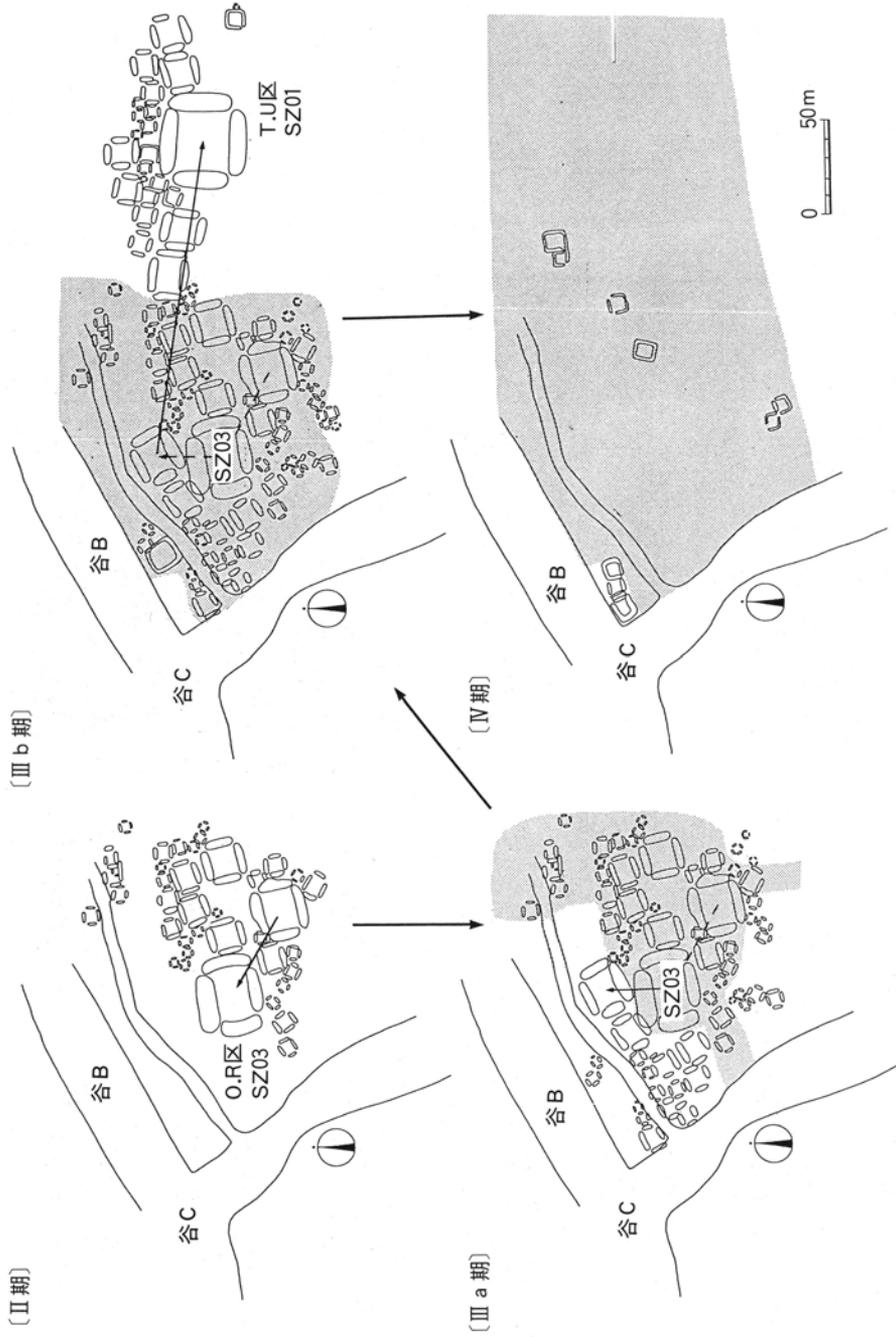
第9図 T・U区SZ01北溝掘出土状態図



T・U区SZ01北溝掘出土状況



第10図 東墓域の構成

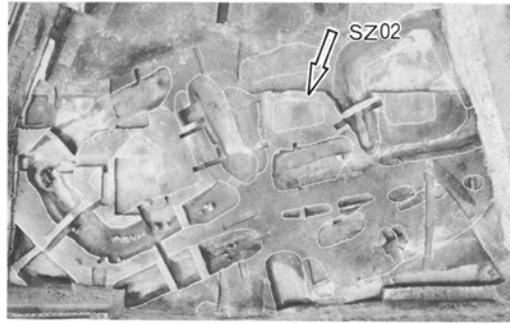


第11図 東墓域の変遷

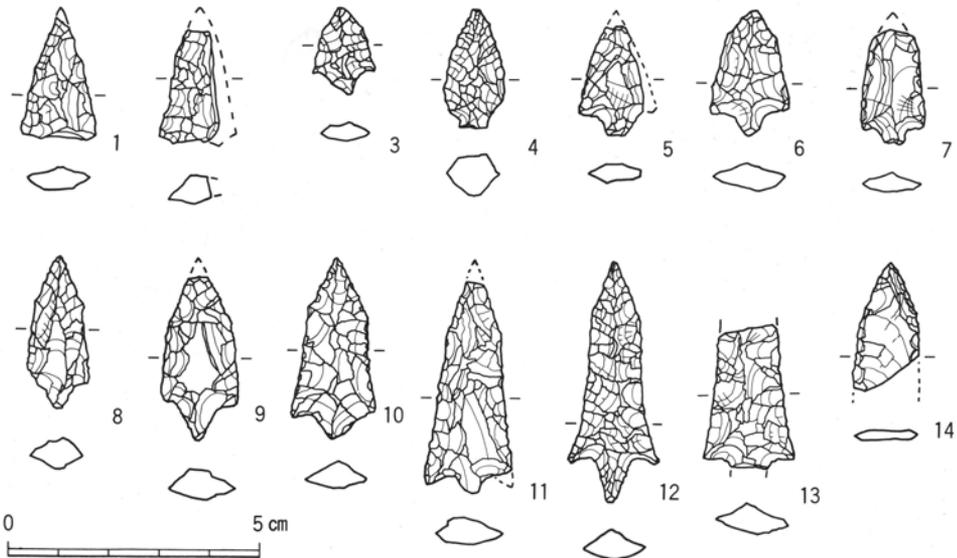
方形周溝墓主体部出土の石鏃 今年度M区では18基のⅢ～Ⅳ期の方形周溝墓が検出され、その内2基の主体部埋土中より石鏃が出土している。SZ02の主体部は、プランの全形が確認されたが、現存長径約1.7m×短径約1.3m×深さ0.2mの土壌内から14点の石鏃（第12図）が出土した。石材は4点がチャート（3・4・12・13）で、他はガラス質石英安山岩である。形態的には、凹基無茎式2点（1・2）、凸基有茎式11点（3～13）、不明1点（14）である。有茎式のうち7点が側縁に肩をもち（6～12）全長3cmを超える大形品（8～14）が多い。

この石鏃の性格については、狭い範囲内に14点が出土しているが、石材のチップなど他の遺物が認められないため、マウンド下の中期前半の住居址の石器製作による混入ではなく、また人為的な統一性のある出土状況ではないことにより副葬品ではないと考えられる。全長3cm、重量2gを超える石鏃の存在は、畿内における中期の石鏃の粗大化という現象と関連があるものと推測される。

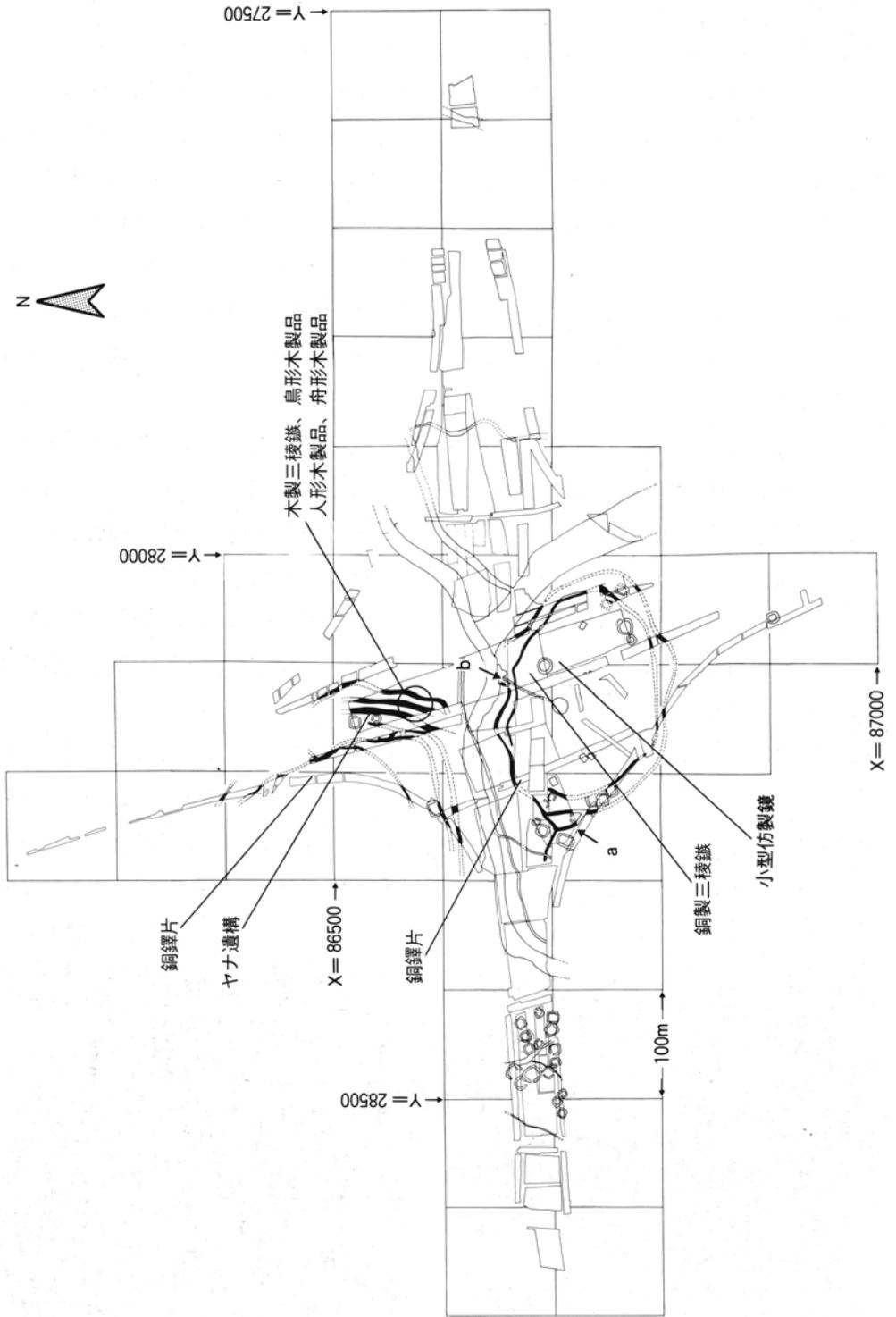
朝日遺跡の石器類のあり方は、包含層出土のものが多いため、不明な部分があるが、今回の資料は、遺構に伴う数少ないものでありその機能と、弥生時代中期の時代性を考える上で新たな問題を提示するものと考えられる。（酒井俊彦）



M区 方形周溝墓群



第12図 方形周溝墓主体部出土石鏃



第13図 朝日遺跡弥生時代後期以降全図 (1:6000)

〔後期〕

環濠 南居住域においては、C・D区、H・J区で後期の環濠が検出されている。

C・D区は集落の西側にあたり、外環濠が分岐して二条の溝となって台形状の突出部を作り出すこと第13図a、内環濠が北側において切れ目をもつこと第13図bが確認された。台形状の突出部は、幅約12m、南北は推定で西側短辺が約20m、東側長辺が約35mを測り、居住域の西側に張り出す。台形部の外側を廻る溝については、外環濠が掘削された後に付加されたものか、両溝が同時に掘削されたものか、分岐点のある地点の調査を行った県教委の調査では確認されていない。外環濠は遺物量は少なく、最下層にV期の遺物、中層以上にVI期以降の遺物を含む。それに対し内環濠には集落に近いのか遺物量も多く、V期末に掘削されVI期に埋没し始めている。

南居住域の北東にあたるH・J区でも環濠の突出がみられた。この地点はC・D区と違い、外環濠は屈折部で一旦切れ、河道側に鍵状に折れ突出部を作っている。ただし東側については河道で不明瞭になっており、環状に廻るのか、河道に繋がるのかは確認されていない。内環濠は中期の落ち込みを避けるように、河道に近い部分で角度をつけて曲がり、わずかに突出す。溝断面形は基本的にU字形であるが、外環濠の切れ目付近ではV字形を呈している。掘削・埋没時期についてはC・D区の状況と同様であるが、東側の上層ではまとまった古墳時代前期の遺物群が出土している。

以上の結果、南居住域の環濠は、大突出部（推定を含め北に1～2ヶ所、南・西にそれぞれ一ヶ所）と小突出部をもった不定形な小判形をなす。これは内環濠が突出部以外の場所で切れ通路を作ることからみて、突出部を出入口とし内環濠の切れ目より入るといった出入形態や、あるいは複雑な形状をとることにより防禦的な役割を強化しているものと考えられる。

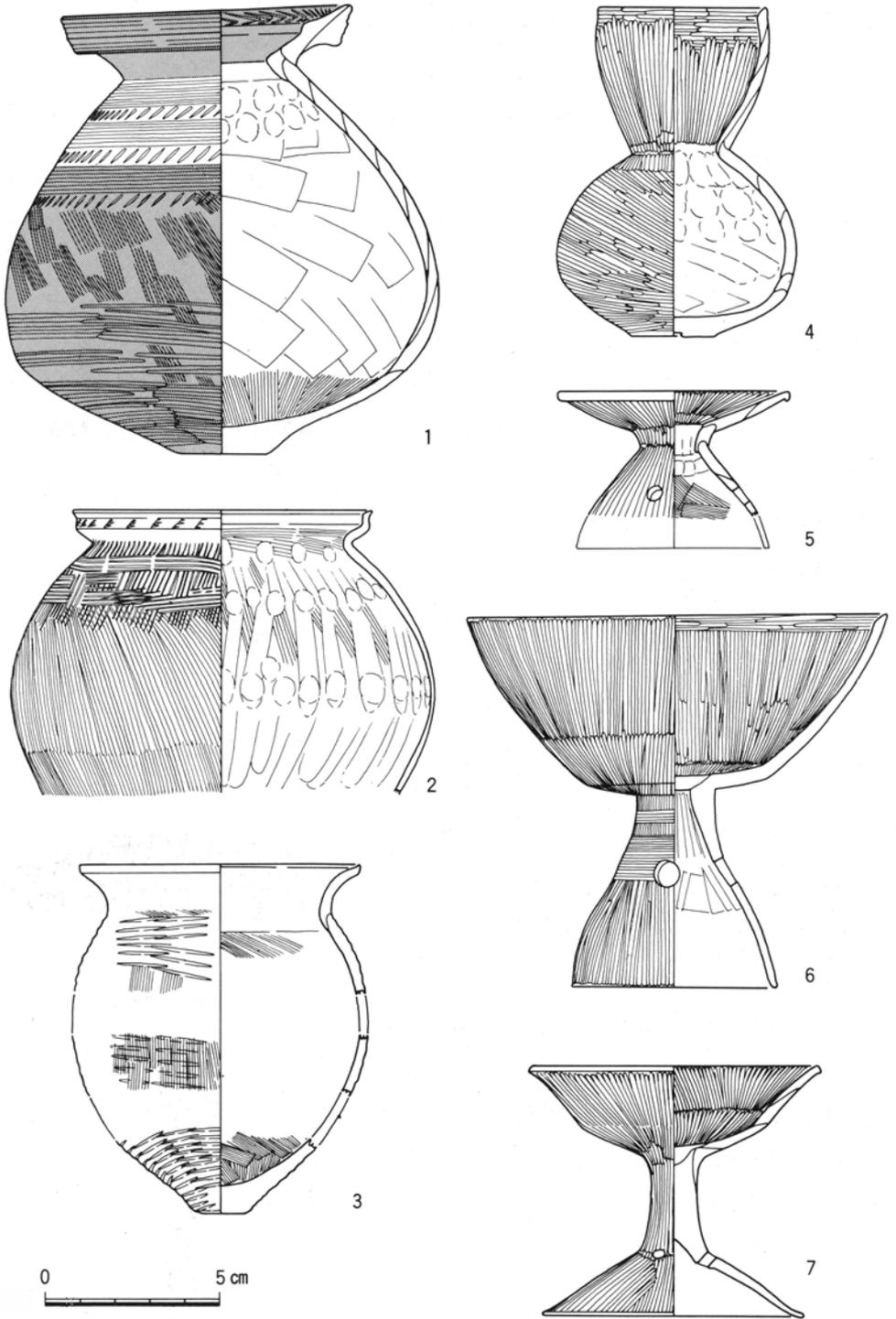
(宮腰健司)



C・D区 略台形突出部(南から)



J区 内環濠小突出部(矢印：東から)



第14図 D区環濠出土土器(1/4)

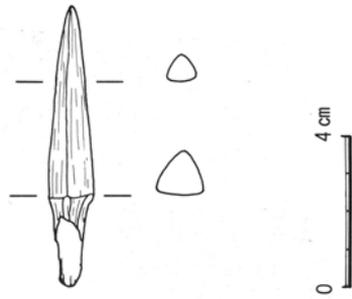
E・F区大溝出土木製品 木製品は、鳥形木製品を除き、北居住域東側に位置するV～VI期の大溝埋土中から出土したものである。当該の大溝は、埋土に多量の自然木を含んだ状態であり、これらは、他の木製品とともに漂着したような出土状況であった。

今回紹介する4点は、これらのうち、呪術及び祭祀に使用したと考えられる資料である。武器形木製品は、大陸系の漢式三角鏃を模倣したものと考えられる。成形は、シャープである。鏃身は、最大部分で一辺 1.3cmの断面正三角形を呈する三角錐形である。全長は 7.4cmを測るが、茎部は先端を欠失している。鳥形木製品は、非常に写実的な形態を呈し、全長11.5cmと他例に比べて小型である。胴部は、幅 2.5cmをはかる。底面には、一辺10mm程度の方形を呈する柄穴が見られ、棒状のものに装着して用いられたと思われる。この資料のみ、大溝埋土上層の灰色粘土層中よりの出土である。

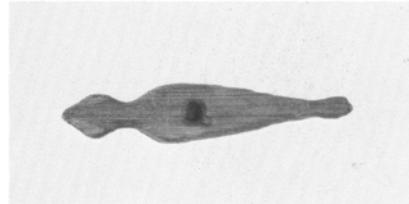
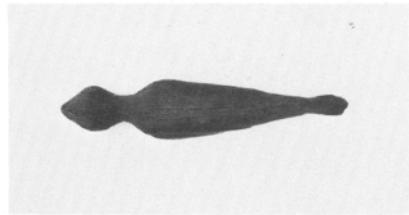
舟形木製品は、側面を欠失しているが、全長は 23.5cmをはかる。

人形木製品は、こけし様の形態をなし全長12.5cmを測る。頭部は円形で、直径 3.5cmである。正面には、目・鼻・口の表現が刀子による切り込みによって施されている。角柱状で、手、足の表現はない。足元に該当する部分は細くくびれ、柄状を呈し、前述の鳥形木製品と同様に、装着して用いられたと思われる。

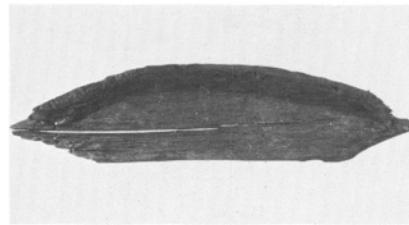
(池本正明)



第15図 武器形木製品



鳥形木製品

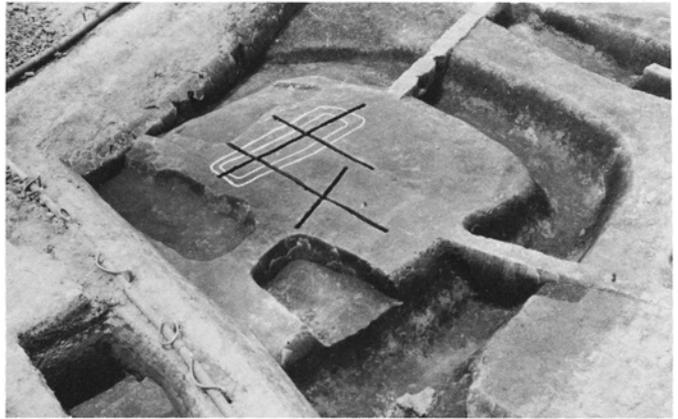


舟形木製品



人形木製品

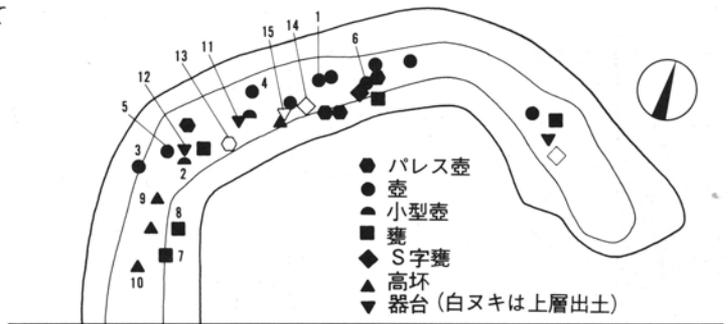
方形周溝墓 本年度の調査で検出された後期の方形周溝墓は、D区3基(V期)・E区2基(V期)・L区2基(V期-1基・VI期-1基)の7基である。この内数基において主体部状の土壌を検出したが、人骨・副葬品棺の痕跡等は認められなかった。しかし、D区のSZ



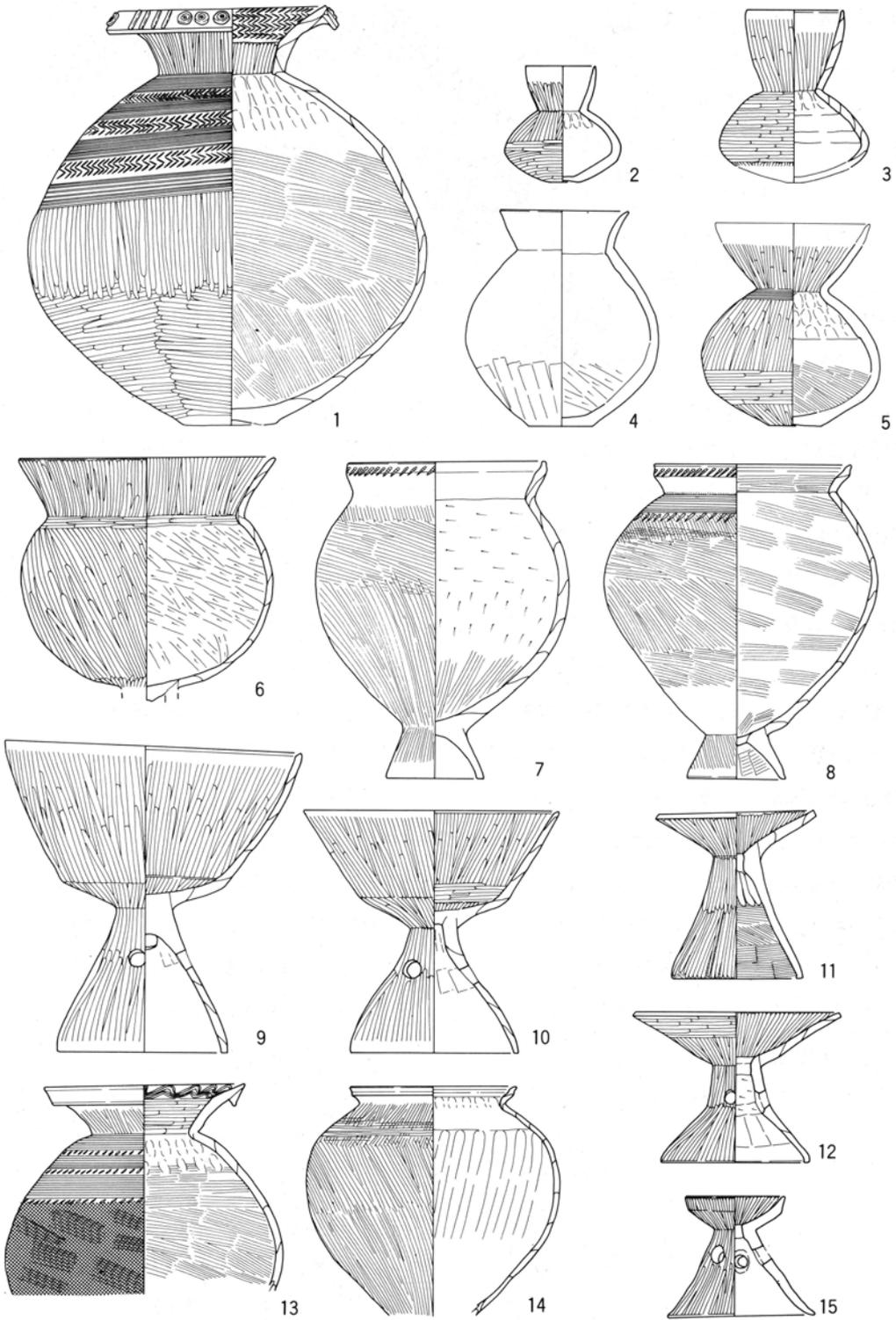
D区 SZ01 (南東から)

03(「SX107」) 盛土中央部からは18個のガラス玉が散乱した状況で出土し注目された。また、各周溝中から土器を検出したものの、これらは本来の位置を示しておらず、周溝の埋没途中において転落した状況を呈している。

L区の方形周溝墓の内東側の1基は、唯一VI期の例であり、周溝中から多量の土器が出土した。この方形周溝墓はV~VI期に属す環濠のすぐ内側に位置する。全体の北半を調査しえたのみである。幅3m・深さ0.7m程の断面ゆるやかなU字形を呈す周溝が廻り、東周溝中央に陸橋部をもつ。台状部東西幅11mを測る。周溝内には多量の土器を含み、大きく上・下層に分離が可能である。上層土器群の多くは破片で、S字甕B類を含むこれらはVI期以降に周溝の窪みに投棄されたものである。下層土器群は周溝底に位置するもの、底より浮くものが存在し、数次にわたる土器の転落が想定される。西周溝に高坏・甕が、北周溝には壺の比率が高く、東周溝は中世土壌による攪乱があり遺物も少ない。西周溝の高坏・受口甕各2点(7・8・9)は、台状部側より転倒した状況で潰れて遺存していた。(1)の器高38cmを測る大型壺は口縁部を下にして転倒しており、口縁部の一部は2m程離れた位置で出土している。この資料の、施文・胎土等の特徴は、尾張平野南部以外からの搬入品の可能性を示している。(丹羽 博)



第16図 L区SZ01遺物出土位置図(1:200)
数字は第17図の遺物番号と共通



第17図 L区SZ01出土土器(1/6)

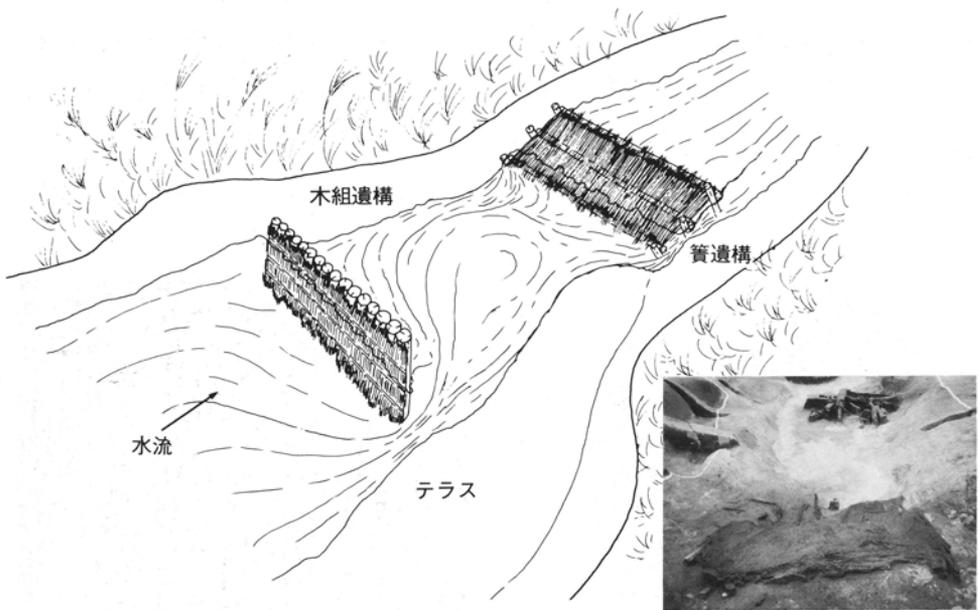
(13~15は上層出土)

ヤナ遺構 ヤナ遺構は、61E区において、北居住域東側に位置するV～VI期の大溝底から検出されたもので、保存状態は良好であった。

遺構は、篋遺構、木組遺構という二つの構築物と、これらの間に挟まれた部分の西側岸に設定されたテラス状の平坦面で構成されている。篋遺構は、幅3.7m・長さ2.0mの木枠上に、アンペラ状の構造物を乗せたもので、南側を持ち上げた、片屋根状の形態が推定できる。木組遺構は、溝底に打ち込まれた柵状の施設で、杭16本が、東側に若干の空間を残すものの、全体として溝をせき止めるような形態を保っていたと推定できる。柵の北側には篋が全面に張られ、南側には倒壊防止の補助杭が見られた。なお、これらの構築物に使用されている木材の樹種は雑多で、特に統一性は見出せない。

このヤナ遺構は、逆上する魚類を捕獲する機能を有する、いわゆる上りヤナに分類できる。篋遺構の両脇をすり抜けた魚類を、木組遺構までの6mに活動範囲を限定し、テラス状の平坦面から捕獲したと考えられる。魚類の習性を利用した、効率の良い漁法と言えよう。

なお、溝は、ヤナの効果をさらに高めるため、篋遺構の北側では溝幅をやや狭く、木組遺構の北側ではやや広くされている。水流を調節するための工夫であろう。（池本正明）



〔ヤナ〕 検出状況と想像図

C. 古墳時代

住居 T区では方形竪穴住居1軒が検出されるが、後世の攪乱のために上部が破壊されており、埋土がわずかに残るのみであった。規模は東西約4mで、南北は不明である。床面上より元屋敷期の高坏の坏部が、倒立した状態で出土している。県教委の調査においても、すぐ北側の地点において同時期の竪穴住居が検出されており、T区の北側部分に居住域が広がっている可能性が高くなった。

J・K・L区では、元屋敷期の竪穴住居が5～6軒検出された。各々4～5mの規模をもつ方形住居と考えられるが、包含層中での遺構検出であったため、詳細については不明な点が多い。また、同一レベルで土器が集中する地点がいくつかみられたが、土層の検討では竪穴住居とは確認されず、住居の可能性があるといた程度にしかとらえられなかった。ただし、J区SB01のように、灰白色粘土の落ち込み範囲により明からに住居とわかるものもあり、床面上よりS字状口縁甕（赤塚分類：C類）が4個体、口縁を内側にして横倒しの状態で出土している。今回の調査において、J・K・L区部分が古墳時代初頭においても居住域として営まれていたことが確認され、朝日遺跡の南部分が弥生時代で終息するのではなく、同時期まで生活の場としての役割を果たしていたことが明らかとなった。

また、上述した居住域内の弥生時代後期から古墳時代初頭の包含層より、小型仿製鏡1面が出土している。面径は7.0cmを測り、一部欠けるが正円に近い形をとる。背文構成は、外縁より外縁帯→櫛歯文帯→乳→鈕の順となる。外縁帯は台形に近い形状をとり、端部に近い部分ほど厚くなり、平縁がくずれた形をとる。櫛歯文は直立しており、基部が広く、鋸歯に近い形状である。乳は4つあり、乳間はサビのため不明確であるが、何らかの図文が描かれている可能性が高い。鈕は半球形で、径2.0cmであり、鏡全体の中で鈕が占める割合が大きい。



小型仿製鏡



J区SB01土器出土状態

溝 R・S区東側において、幅2～5m・深さ約80cmを測り、南北に走る古墳時代前期の溝SD11が検出された。SD11はわずかにS字状に蛇行し、形も不定形であるが、これは南北に並列する2基の弥生時代中期の方形周溝墓の東周溝を繋げ、1条の溝に作り替えたため生じたものと考えられる。SD11は発掘区北側の県教委調査部分でも検出されており、同様に方形周溝墓の溝を利用しながらさらに北に伸びることが確認されている。また、古墳時代前期に旧地形を利用し溝を再掘削する例として、R・S区SZ03の周溝、T・U区SZ01の周溝がある。両墓とも一辺30mを超える弥生時代中期の大型方形周溝墓であるが、溝中層まで古墳時代の土器が出土している。掘り返しが行なわれたという確証は得られなかったが、少なくとも古墳時代前半までは溝としての形状が残っていて、それを利用していることは確実で、中期の遺構が完全に埋没せずに古墳時代まで残っていたという事実は、当期の朝日遺跡の景観や自然環境を考える上で興味深いものとなろう。

土器 T・U区SZ01の周溝は、上述したように再利用された溝で、古墳時代前期の土器廃棄がなされている。廃棄は短時間でなされたものではなく、ある程度の時間幅をもち、数回にわたって行なわれている。遺物は、分層しては取り上げられなかったが、およそ古墳時代前期初から前期中葉までの幅をもつ。器種はほぼ全部揃っており、当時期の器種構成を考える上で重要なものになろう。また、第18図5・10のような県内では出土例の稀な外来系土器もみられる。

古墳 J・K区にまたがって、溝基底の南北径約10.5m、東西径約10mを測る円墳が検出された。墳丘は後世の削平をうけ残存せず、周溝（幅約2.5m・深さ約30cm）のみが確認された。遺物は、周溝下層より須恵器甕1個体が単独で、直立したまま土圧によって押潰された状態で出土している他、若干の須恵器・土師器片がみられた。これらの遺物からみて、円墳の時期は5世紀後半になるものと思われる。約50m西にある検見塚付近でもほぼ同時期の遺物が出土しており、検見塚も古墳であるとすれば、2基並列して存在していたということになる。

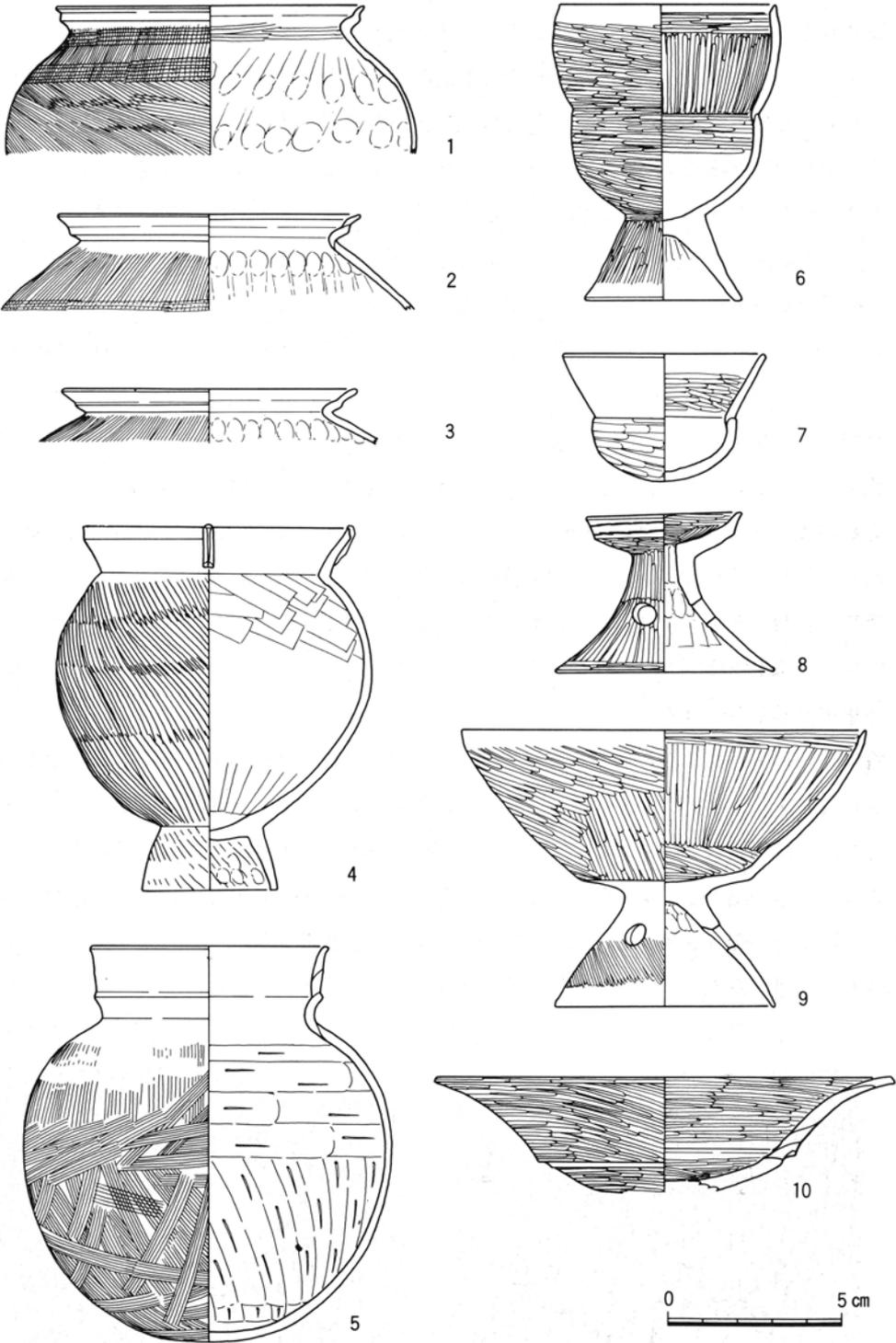
(宮腰健司)



J・K区 SZ01 (矢印は検見塚)



SZ01周溝内須恵器



第18図 T・U区SZ01北溝上層出土土器(1/4)

D. 中世

土壌 検出された中世土壌は108を数える。土壌は平面長方形をなし、埋土は黒色土と灰褐色土の攪乱土である。遺物は、灰釉系陶器等が数基から出土したのみである。規模は長軸5m以下のものがほとんどであり、2.7~3mに集中する。また、長軸は真北より西へ50°~80°東へ6°~30°に振るものが多い。

同様な性格を持つ土壌は、土田遺跡、阿弥陀寺遺跡、大淵遺跡等でも見られる。埋土の状況、規模、長軸の方向から窺える規則性より、まだ検討の余地はあるが、墓塚としての可能性が高いと言える。(佐藤公保)



K・L区中世土壌群

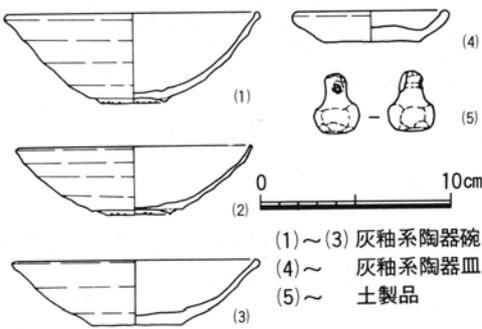
〔土 壌 一 覧〕

地区	土壌番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	方 向
61A・B	S K01	1.02	0.82	0.07	N 85°30' W
	S K02	—	—	0.21	N 70° W
	S K03	—	—	0.11	—
	S K04	—	1.75	0.38	N 74° W
	S K05	3.27	1.69	0.10	N 75° W
	S K06	2.30	1.80	0.17	N 77° W
	S K07	0.90	0.80	0.17	N 54°30' E
61C	S K21	—	2.00	—	N 89° W
	S K22	2.80	2.00	—	N 70°30' W
	S K23	4.81	1.32	0.60	N 17° E
	S K24	3.80	1.40	—	N 69° W
	S K27	4.20	2.60	—	N 18°30' E
	S K29	1.90	—	0.24	N 10° W
	S K30	2.51	1.40	0.21	N 11°30' E
61D	S K01	2.94	1.73	0.20	N 6° E
	S K02	—	1.90	0.43	N 78° W
	S K03	—	1.80	0.50	N 77° W
	S K04	2.43	—	0.18	N 72°30' W
	S K05	—	1.53	0.08	N 29°30' E
	S K06	—	1.62	0.13	N 25° E
	S K07	4.56	1.76	0.39	N 76°30' W
	S K08	3.58	2.07	0.75	N 13°30' E
	S K09	4.55	2.43	0.77	N 18°30' E
	S K12	2.98	1.85	0.12	N 72°30' W
	S K13	2.06	1.53	0.19	N 31° E
	S K14	2.97	1.04	0.02	N 58°30' W
	S K15	3.00	0.78	0.29	N 55°30' W
	S K16	2.70	2.10	0.28	N 24°30' E
	S K17	2.08	1.93	0.38	N 66°30' W
S K19	—	1.06	0.41	N 71° W	
S K20	1.99	1.39	0.22	N 77° W	
S K25	1.63	0.50	0.21	N 10° E	
S K26	4.14	1.52	0.54	N 18°30' W	
S K28	2.92	1.08	0.20	N 20°30' E	
S K31	2.16	1.19	0.17	N 16° E	
S K32	5.73	—	0.65	N 76°30' W	

地区	土壌番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	方 向
61E・F	S K01	—	1.65	—	N 90° W
	S K02	4.60	1.90	—	N 90° W
	S K03	2.30	2.20	—	N 8° E
	S K04	3.40	1.10	—	N 83° W
	S K05	—	1.20	—	N 11°30' E
	S K06	—	1.20	—	N 77°30' W
	S K07	1.50	1.20	—	N 65°30' W
	S K08	1.55	1.00	—	N 4°30' W
	S K09	—	1.40	—	N 77°30' W
	S K10	—	1.20	—	N 88° W
	S K11	—	1.70	—	N 90° W
	S K12	1.80	1.30	—	N 81° W
	S K13	6.80	3.00	—	N 1°30' E
61G	S K01	—	—	—	—
61J	S K01	3.13	1.68	0.56	N 80°30' W
	S K02	3.32	1.29	0.53	N 70°30' W
	S K03	5.73	2.00	0.53	N 74°30' W
	S K04	5.76	1.60	0.42	N 76° W
	S K05	4.98	1.90	0.39	N 7° E
	S K06	4.77	1.42	0.46	N 22°30' E
	S K07	2.98	1.80	0.59	N 68° E
	S K08	5.00	1.74	0.54	N 17°30' E
	S K09	6.20	1.63	0.53	N 16°30' E
	S K10	8.19	2.13	0.50	N 8° E
	S K11	3.32	1.40	0.42	N 14° E
	S K12	11.39	2.18	0.66	N 74° W
	S K13	10.17	1.98	0.68	N 59° W
	S K14	3.05	1.85	0.82	N 73° W
	S K16	6.29	1.29	0.47	N 7° E
	S K17	3.68	—	0.49	N 6°30' E
	S K19	3.40	2.09	—	N 31°30' W
61K・L	S K01	2.29	1.51	0.44	N 38°30' W
	S K02	3.20	1.70	0.54	N 59° W
	S K03	4.12	1.30	0.43	—
	S K04	—	—	0.45	N 11° E
	S K05	5.59	3.00	0.73	N 18°30' E

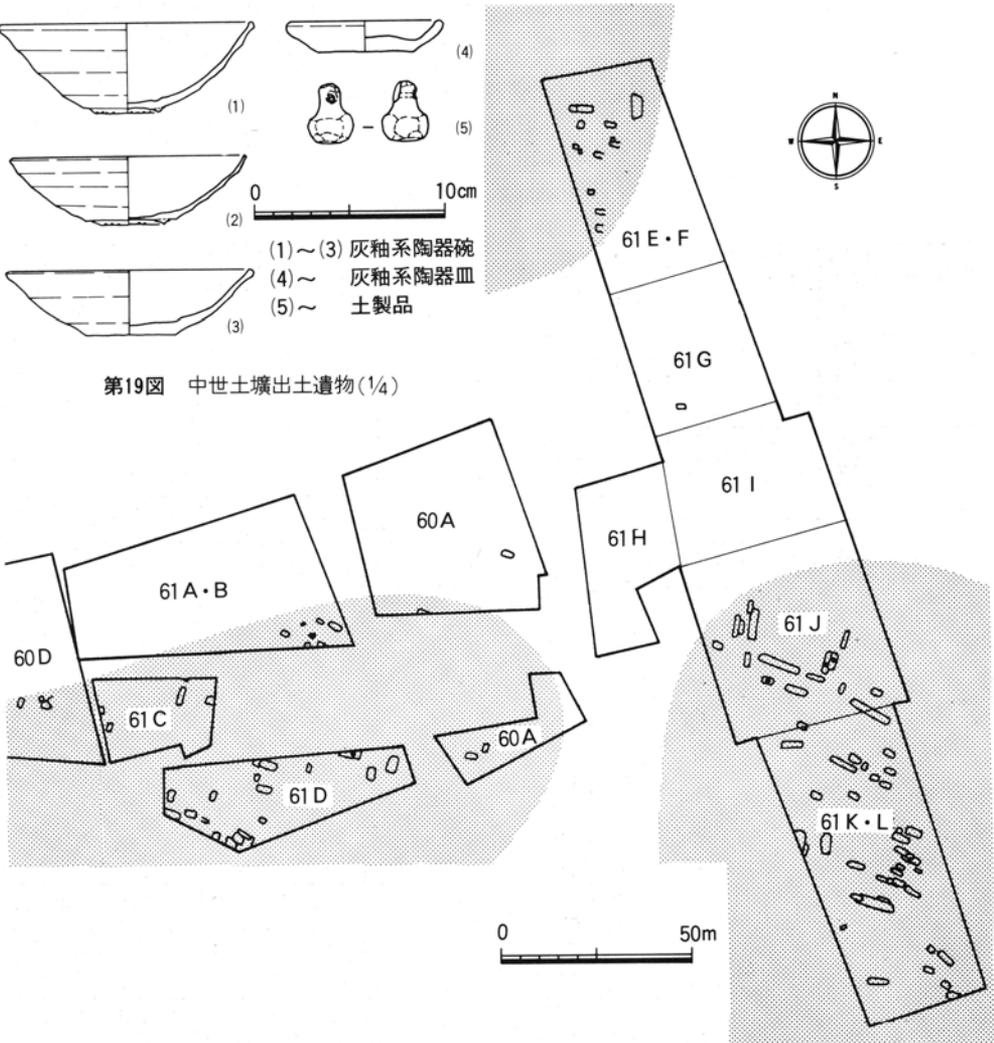
地区	土壌番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	方向
61 K・L	S K06	2.93	1.62	0.39	N 46°30' W
	S K07	4.46	1.40	0.59	N 69°30' W
	S K08	4.62	1.81	0.68	N 68°30' W
	S K09	3.60	1.94	0.64	N 54° W
	S K13	4.57	1.99	0.15	N 59°30' W
	S K14	2.80	1.19	0.81	N 74° W
	S K15	—	1.77	0.69	N 54°30' W
	S K16	—	1.57	0.75	N 54° W
	S K17	2.08	—	0.50	N 56°30' W
	S K18	4.39	1.77	0.54	N 52° W
	S K19	3.60	1.93	0.52	N 53° W
	S K20	—	1.53	0.38	N 65° W
	S K21	—	1.52	0.41	N 71° W
	S K22	4.15	1.81	1.00	N 58° W
	S K23	9.00	2.32	0.60	N 68°30' W
	S K24	4.64	—	0.52	N 68°30' W
S K25	2.75	1.57	0.35	N 50°30' W	
S K26	3.34	1.31	0.56	N 89° W	

地区	土壌番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	方向
61 K・L	S K27	4.40	1.96	0.33	N 51°30' W
	S K28	2.73	1.53	0.44	N 76° W
	S K29	3.10	1.57	0.39	N 63° W
	S K30	—	2.20	0.33	N 74° W
	S K32	2.87	1.93	0.43	N 32° E
	S K33	—	1.53	0.59	N 77° W
	S K34	2.75	1.26	0.48	N 57°30' W
	S K35	2.49	1.35	0.40	N 68° W
	S K36	2.34	—	0.37	N 77° W
	S K37	2.93	1.42	0.43	N 64°30' W
	S K38	3.72	1.48	0.63	N 84°30' W
	S K39	7.61	1.96	0.71	N 64°30' W
	S K40	3.82	1.81	0.54	N 47° W
	S K41	2.51	1.62	0.11	N 37° E
	S K42	5.76	2.02	0.85	N 84°30' W
	S K43	—	1.45	0.25	N 54° W
	S K44	1.96	0.99	0.36	N 69° W
	S K45	2.59	1.56	0.67	N 53° W



(1)~(3) 灰釉系陶器碗
(4)~ 灰釉系陶器皿
(5)~ 土製品

第19図 中世土壌出土遺物(1/4)



第20図 朝日遺跡中世土壌群分布図

II まとめ

今回の調査で明らかになった点あるいは注意される点を時代ごとにまとめる。

縄文時代 谷B・Cの弥生時代包含層の基底層から縄文時代中・後期の土器及び木製品を検出した。縄文土器は昨年度も出土しており、本年度も出土したことによって、単なる偶然による出土とは言えなくなった。しかも、**杓子状木製品**や板材の出土していることは生活の営まれていた蓋然性の高いことを示す。微高地上から縄文時代の遺構を未発見であるとはいえ、何らかの生活痕跡を今後発見できる機会は多分にあると予想される。

弥生時代 〈**囲郭集落**〉の具体像がより鮮明の度を増した。**防禦施設Ⅰ**としたⅡ期における大溝の錯綜状況、**防禦施設Ⅱ**としたⅢ期末の谷C部分での重装化状況など、今後の弥生集落観の構成に与える影響は大きいものがある。特に居住域内部と外部の区画が、一定の幅をもった区画帯によってなされている点は〈**囲郭集落**〉を分類する上での重要な視点となろう。つまり、溝で囲まれたただけの場合と、溝が錯綜しながら一定の幅をもって居住域を取り巻く場合とでは、両者を同じに扱うことはできない。〈**囲郭集落**〉という用語に則れば、居住域を**内区**あるいは**内郭**とし、取り巻く区画帯を**外区**あるいは**外郭**と呼称することができる。

こうした**内郭・外郭**という区分はV期末～Ⅵ期初めの環濠についても適用できる。南環濠では外側の溝に現状で1ヶ所の切れ目があることを1区で確認したが、この切れ目の西方では内側の溝が長さ50mにわたって途切れており、県教委調査の1ヶ所とあわせて2ヶ所の切れ目を確認した。内側の溝の切れ目は、内外溝間への出入りあるいはさらに外側溝の切れ目を通しての外部との出入りを行うためと考えられ、この場合は通路としての外郭という意味合いが強いかもしれない。中期に比べれば外郭の幅も狭く複雑さもないが、出入口の設定にあたって外郭を設定するという傾向は認めることができる。V期中段階の1条環濠にあっても、D区では外郭として略台形状突出部が設けられているのである。

V・Ⅵ期の環濠を考える上で無視できないのは、南環濠の場合外側の溝（V期中段階に掘削され、V期末からⅥ期初めに再掘削される基本的な溝）が先述した略台形状突出部の他に小突出部を北に3ヶ所、南に1ヶ所かたちづくっている点である。谷Cに面した北側の3ヶ所は多分にコンターラインに一致するようではあるが、自然地形に影響されての小突出部形成とは考えられない。ほぼ同時期の阿弥陀寺遺跡、伊場遺跡の環濠も小突出部を形成していることは、小突出部の形態、機能の共通性を窺わせる。今後詳しく検討する必要がある。

ところで、〈**囲郭集落**〉の場合問題となるのが**内郭**の構造である。〈**集住**〉を前提とし

て〈囲郭集落〉の形成をみる点では、単に居住域が圧縮されるのか、一定の規則のもとで居住域の密集化が図られるのかを明確に識別する必要がある。それは根本的には地割の形態として現象すると思われるが、Ⅱ期の〈非囲郭集落〉時の居住域でさえ柵、土坑に規則的配置がみられることは、限定的に区画された内郭においてはより一層整然とした配置がとられていたと推定するに足ると考える。

方形周溝墓は、東群で新たに存在を確認した2基の大型方形周溝墓の他に、「報告書」1982で西Ⅱ支群とされた地区でⅣ期に属す方形周溝墓を2基追加し、Ⅳ期方形周溝墓は20基を越えるのも間近になった。

大型方形周溝墓の成立は、〈囲郭集落〉の形成、四隅の切れる形態（A4型）の成立に深い相関を有することはほぼ間違いない。周溝から出土した農耕土木具は葬送儀礼の一貫した連続の中において理解すべきといえるが、当該儀礼は大型方形周溝墓を密接に関っていた可能性もあり、今後の類例増加が期待される。

Ⅳ期方形周溝墓の特異性はすでに注意されていたが、今回もまたⅡ・Ⅲ期との相違が目立った。平面形はA4型以外であり、盛土中に胴部穿孔の土器棺（壺・甕）をもち、周溝内出土土器も廃棄を示す例や壺口縁部の一部を欠くものがあった。主体部は木棺が想定できるとはいえ、全く棺材は遺存していない。木棺そのものは、Ⅱ期の方形周溝墓に木口部分にピットをもつ土壌があるから、特にⅣ期に限定されるものではないが、複数主体を基本とする点ではⅡ・Ⅲ期の単葬基本と異なる。

Ⅳ期の方形周溝墓を考える上で問題となるのは、Ⅱ・Ⅲ期大型方形周溝墓にみられる周溝のⅣ期での再掘削である。「SX048」はⅢ期前半の周溝が再掘削され、Ⅳ期の土器が流れ込んでいた。周溝平面形に造り替えは認められず埋葬面の変遷も後世の削平のため確認できないために方形周溝墓の再利用かどうかについては判断できない。その他T・U区SZ01からの同じくⅣ期に属する土器の出土や、R・S区SZ03の再掘削など、築造時と以後の状況を細かく追跡する必要が出てきたと言えよう。

土器・石器・木器・骨角器等の遺物は今年もまた膨大な出土量をみた。主要なものは本文で取り上げておいたが、今後整理を進める中で注目すべき資料が新たに出てくることであろう。

古墳時代 本年度の調査で朝日遺跡の終末年代が降り、古墳時代前期まで下がることは確実となった。また、東墓域のうちⅢ期後半に属す方形周溝墓群の上層から古墳時代前期の遺物が多量に出土し、当該地も居住域となっていたようである。これらの居住域とともに検出した5世紀後半の円墳や検見塚の古墳である可能性を考えると、古墳時代前期居住域、墓域両者の動向において5世紀代がひとつの画期をなすといえようか。（石黒立人）